

川端康成の少女小説から見える少女像

名取朋美

作家、川端康成は1968年に日本人初のノーベル文学賞を受賞した文学者である。『伊豆の踊子』(1926年)、『雪国』(1935年)などを代表作とし、成人向け文学だけでなく児童文学も多数作品を残している。児童雑誌に掲載された作品数は28篇にもなるが、その知名度は高くない。これまでの研究で取り上げられることも少なかった。しかし『乙女の港』(1937年6月-1938年3月)が復刻版として2010年に刊行され、川端康成の少女小説が改めて注目を集めている。

本研究では川端康成の少女小説に注目し、その少女像を考察した。川端康成が少女小説を書くなかで、少女達にどのような「少女」であってほしかったのか。川端康成の描くこの「少女像」には川端康成なりの個性があったのか、ということについて論究した。『川端康成全作品研究事典』(1998年)と『川端康成全集』(1969年-1974年)に収録されていなかった『陽炎の丘』(初出不明)、『花と小鈴』(1952年2月-12月)、『親友』(1954年1月)の3作品も含め、川端康成の少女小説全体を通して川端康成の少女像を考察した。

第一章では川端康成の少女小説を考察するために、少女小説を書いた川端康成の人物背景となる「孤児根性」と「綴方」を見ていき、それらが川端康成の少女小説にどう影響を与えていたのか考証した。「綴方」について考察することで、川端康成が教育に興味を持っていたと結論付けた。そして最後に川端康成が少女小説を書き始めた背景を考察し、その背景に教育的興味と同時に金銭的理由もあったことが考えられた。

第二章では『少女倶楽部』(1923年-1962年)の編集方針と川端康成が少女小説を書いていた時代背景を考察した。さらに『少女倶楽部』における川端康成の少女小説がどのようなものだったのかを論じ、ある程度編集方針を受け入れていたと考えられるが、「現実を受け止める強さ」を意識して書かれていたと結論づけた。

第三章では『少女の友』(1908年-1955年)の編集方針と川端康成が少女小説を書いていた時代背景を考察し、『少女の友』における少女小説がどのようなものだったのかを論じた。『少女の友』では、川端康成は当時の「良妻賢母」ではなく、「自分自身で考えて、行動していく」という少女像を描いていたと考えられる。

第四章では『ひまわり』(1947年-1957年)の編集方針と川端康成が少女小説を書いていた時代背景を考察し、『ひまわり』における少女小説がどのようなものだったのかを論じた。混乱する戦後に刊行された『ひまわり』において川端康成は、少女たちが明るい未来を見られるような小説を書いていたことが見受けられた。

第五章では川端康成の最後の少女小説『親友』について論じ、各雑誌の川端康成の少女小説がどのように変遷していったのかを考察し、それぞれの少女雑誌に発表された少女小説に異なった特徴があることを結論づけた。

川端康成は少女小説を書くことにより、少女たちに「価値の高い少女文藝」を読んでもらい、自分なりの表現を学んでほしかったのではないかと考えられる。

(指導教員 黒古一夫)